

き、部に昇格したのは2001年。緒方教諭が新米教師として赴任した10年前、ダンスを教えて欲しいとい



ダン

全国高等学校ダンス部現任、ダンスに限らず4年制大学でもダンス部がある。数ミッドウェーに、ストリートダンスのブームが今年から

に変わらないうちに、市イベントや祭りに呼ばれる機会も多くなった。サッカーJリーグの試合前

に踊り重たく、肩に負担がかかる。まだまだ数は増えるが見通している。(松本英一郎)

意見をファクスで掲載

フィリピン「日系大学」の活躍

白く輝く河床。教室で学ぶ老若男女の真剣な顔。忘れられない光景だ。もう17年も前のことになる。フィリピン・ミンダナオ島を取材で訪れた。島には戦前、マニラ麻栽培に入植した日本人の地域社会があった。だが、1941年の日本軍によるタバオ占領で、在留邦人は軍に組み込まれた。4年後、米軍の反攻。邦人は溪谷で逃避行を続け、爆撃や飢えで多くの人が亡くなった。悲劇の地を歩き、河床に立ち尽くしたことを覚えている。

終戦後、現地に取り残された日系2世は、戦時中の日本軍の行為に対する

報復を受けた。日系人であることを隠し、日本語も使わず、ひっそりと暮らしてきた。日本語学校がタバオに設立されたとき、終戦から既に40年以上が経っていた。日系の誇りを取り戻すた

め言葉を学ぶ人々を取材し、「学ぶことはこういうことなのか」と感動した。その後もタバオの日系人のことは、気が掛かっていた。NPO法人「日本フィリピンボランティア協会」(東京

教育現論

〈隔週土曜掲載〉



編集委員・勝方信一

・調布市)と日系人会が4年前、タバオにミンダナオ国際大学を開校したときは、望んでその賛助会員となった。タバオでの教育活動に惹かれるのは、そこに教育の大きな可能性が示されているからだ。日系人支援で始まった教育活動は、地域の課題解決への取り組みとなり、今、日本とフィリピンの架け橋となりつつある。

日本語学校の実践は、幼稚園、小学校、ハイスクール設立へと発展した。同大学は学生250人余と規模は小さいが、国際、福祉、教員養成の3つのコースを持つ。日本語必修で、学生は、孤児院や貧困集落でのボランティア活動にも携わる。日本の福祉施設での活動も、実施されている。

逆に同大を、学生の体験学習、英語学習の場とする日本の大学もある。介護が必要な日本のお年寄りのタバオ短期滞在受け入れも始まった。小泉首相は9日、フィリピンのアロヨ大統領と会談し、経済連携協定(EPA)を締結した。今後、日本で就労する人がタバオでも増えるだろう。だが、それは地域の担い手が流出することでもある。

元中学教師で住職でもある網代正孝・同協会会長(67)は、「日本は高齢者問題、フィリピンは教育・貧困の問題という弱点を持つ。互いの弱点を克服するため、金だけでなく、人が行った来たりする関係構築を」と訴える。小さな大学が、2国間の歴史と課題を体現している。多くの人の思いがこもった大学である。